

西川と子供たち

昭和九年の手取川洪水を機に、新西川が掘削されたので竹藪浴いの西川は、少し狭く、流れが少なくなつたが、夫々の道には「河戸」(こうど)があつて、子供たちの「おしめ」や簡単な洗濯をする場所でもあつた。

兩岸の竹藪や、群生する葦の間に「葦きり」が鳴き、「おはぐるトンボ」が、ゆつくり羽を広げたり、羽を閉じたりしていたし、夕方になると「螢」が淡い灯を灯しながら、恋を謳歌していたりした。

また、竹藪の下は、「ぐず」や「なまず」が「うろ」と呼んだ、穴の中に潜んでいるので、そつと手を入れると、容易く、大きな鯰を捕まえる事が出来た。

昭和九年の「大水」は凄かった。

上流の、下清水・上清水で崩壊した手取の堤防は、根上の田園を一举に、さながら湖水にしてしまった。

数ヶ月も引かなかった水は、夏休みの子供たちの舟遊びに、持って来いではあつたが、損害は甚大なものがあつた。

西川に架かつていた橋は、和船の底板を転用した物であつたので、湖水になつた所に漕ぎ出すのには、持って来いの船であつた。

そんな、悪水の西川であつたが、子供達にとっては、まさに天国の水辺であり、蛭貝をも、汚い水に潜つて採るのであつた。

